



今回の調査で見つかった生物は、魚類ではハゼ類が、カワアナゴ（写真左）、ウロハゼ、ヌマチチブ、アシシロハゼ、ゴクラクハゼ、アベハゼ、ミミズハゼ、ヒナハゼ、ウキゴリ属の一種の合計9種類。その他には、ボラ、ニホンウナギ、ギンブナ、ミナミメダカ、コイ科の一種の稚魚の合計5種類。



甲殻類では、アリアケモドキ、クロベンケイガニ、モクスガニ、ミナミテナガエビ、ミゾレヌマエビの5種類。貝類では、イシマキガイ、台湾ンシジミの2種類が見つかりました。

この中で、カワアナゴは、体長1.5cmくらいの稚魚が26匹も見つかりました。このカワアナゴは、河川の下流域や海水が入ってくるような水域で見られ、大きくなると30cmくらいになります。しかし、現在神奈川県では数を減らしてしまっています。でも、今回の調査では、上記のとおり稚魚が26匹も見つかり、カワアナゴが馬入水辺の楽校の辺りで繁殖している可能性があり、とても喜ばしいことと思います。

竹を束ねて沈めた柴漬け。魚などの住処となります

また、神奈川県ではとても珍しく、腹部がオレンジ色のカニ、アリアケモドキ

が180匹！も見つかり、相模川は種の多様性が高い水域だと改めて感じました。しかし、一つだけ残念なことがありました。それは台湾ンシジミが見つかったということです。台湾ンシジミは外国からやってきた外来種で、直接的に在来種を襲うわけではありませんが、このまま増え続ければ、生態系に影響がでてくることも否定できないからです。

他に感じたこととして、南方系の生物が多く採れたことです。今回の調査で見つかった南方系の生物は、ヒナハゼ、ミナミテナガエビなどです。このような生物は、数十年前は見つかることはなかったようです。

数十年前は見つからなかった生物が見つかるということは、地球温暖化の影響かもしれません。